

るイネ科雑草の発生抑制効果は6月中旬まで持続し、無散布に比べ斑点米カメムシ類の発生も減少することが確認された。

10. 本技術の導入効果と今後の展望

本技術の導入により、斑点米の発生を少なくするだけでなく、除草・防除作業の分散と省力化、農薬の使用回数の削減も可能であり、農家への波及効果は高いと考えられる。

本技術を開発した当初は、福井県のような積雪地帯である北陸、東北など、限られた地域でしか活用できない技術と考えていたが、冬期間(12

月～3月)の平均気温が10℃以下になる地域であれば、積雪がなくても十分な効果が期待できるものと思われる。

また、農地だけでなく、農地に隣接する高速道路ののり面や河川の堤防、農道ののり面など、斑点米カメムシ類の生息場所となる雑草地も含めて、広域的に冬季にDBN粒剤を散布することによって、さらに防除効果が向上するものと思われる。福井県では、2014年度以降も、農家組合、高速道路や河川の堤防を管理する関係機関と連携を図り、実用化に向けた実証試験を継続する予定である。

コラム

平成26年度 専門研修会を取材して

平成26年8月20日から22日にかけて、中央農業総合研究センターにおいて都道府県の農業関係試験研究機関の雑草防除担当者や防除所や普及指導機関の職員、関係団体の担当者を対象に、「耕地雑草の防除対策立案のための調査・研究手法」の専門研修会が開かれたので、編集部では21日に取材に訪れた。

この研修会は、最近問題となっている難防除雑草の蔓延防止のための調査研究の推進を図ると同時に、雑草情報の交換を図るために開かれたものであり、以下に紹介するように座学ばかりでなく実習も受けるという実践的な内容である。

講義は以下の9課題にわたっている。

- ①雑草生物情報データベースについて
- ②雑草の診断と増減のしくみ
- ③雑草の埋土種子調査の意義と概要
- ④雑草害と防除対策の経済評価
- ⑤雑草の生物的特性と試験研究での取扱い
- ⑥外来雑草対策のための空間管理の必要性

⑦雑草発生状況の現地調査データ解析手法とその活用例

⑧病害虫分野における農薬登録促進の取り組み例

⑨県レベルの難防除雑草の総合的対策事例

以上のように雑草情報のデータベース作成から技術導入の経済評価まで広範囲な内容である。

同時に①雑草の同定・識別、②雑草植生の簡易調査法、③埋土種子調査について、実際に雑草や種子に接しての実習が行われた。

とても盛りだくさんの内容であるが、受講生にとってもっと大きな収穫は、2泊3日の泊りがけによる多くの人的ネットワークができたことであろう。当協会から参加したスタッフに話を聞くと、研修会に参加できて大変良かったとのことであった。この研修会への参加は今後の仕事に大いに役立つに違いない。(編集部)



写真-1 内野講師による「雑草の生物的特性と試験研究での取扱い」



写真-2 炎天下での雑草調査法の実習